

<オリエンテーション>

A. テーマ：キリスト教思想研究入門——古代から宗教改革

B. 目的

この特殊講義は、すでに系共通科目「キリスト教講義」を受講し、キリスト教思想研究に関心のある学部生を対象にしている。キリスト教思想研究を目指す際に身につけておくべき事柄について、またいかなるテーマをどのように取り上げるのかについて、解説を行う。

C. 内容

本講義では、前期後期ともに、まず、10 回程度の講義を行い、残り 5 回の授業において、受講者の研究発表を実施する。キリスト教専修学部生（研究生も含めて）に対しては、この研究発表によって、卒論指導を行う。

今年度の前期のテーマは、古代キリスト教思想研究である。キリスト教の誕生と制度化（初期キリスト教）、初期カトリシズム、ヘレニズム世界のユダヤ教、グノーシス主義、キリスト教教父、基本教理の形成、ローマ帝国国教化などについて、現在の研究状況を概説する。

後期のテーマは、中世キリスト教思想（宗教改革を含む）である。西方キリスト教会のゲルマン民族への浸透、修道制の展開、スコラ的文化的総合、自然神学、都市の発展と十字軍、12 世紀ルネサンスなど。

D. 確認事項

受講者には、前期と後期に、一回ずつの研究発表が求められる（一部、レポートに代えることも可能）。成績評価は、この研究発表によって総合的に行う。

受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（金 3・4）を利用するか、メール（アドレスは、授業にて指示）で行うこと。

E. 授業スケジュール

前期：初期キリスト教から古代キリスト教

オリエンテーション——キリスト教思想史について	4/14
1. キリスト教の成立と初期キリスト教	4/21
2. キリスト教の制度化と初期カトリシズム	4/28
3. ヘレニズムのユダヤ教	5/12
4. グノーシス主義	5/19
5. キリスト教教父 1 ——使徒教父、弁証家	5/26
6. キリスト教教父 2 ——オリゲネス、アレクサンドリア学派	6/2
7. キリスト教基本教理の形成	6/9
8. キリスト教の国教化	6/16
9. キリスト教教父 3 ——アウグスティヌス	6/23
10. 研究発表	6/30
11. 研究発表	7/7
12. 研究発表	7/14

1 3. 研究発表	7/21
1 4. 研究発表	7/28

後期：古代キリスト教から中世、そして宗教改革

オリエンテーション	9/29
1. ゲルマン民族とキリスト教	10/6
2. キリスト教修道制	10/13
3. 中世キリスト教世界のダイナミズム	10/20
4. キリストと文化——スコラ的文化総合	10/27
5. 自然神学の諸問題	11/10
6. 研究発表	11/17
7. 研究発表	11/24
8. 研究発表	12/1
9. 研究発表	12/8
1 0. 研究発表	12/15
1 1. イスラームと1 2世紀ルネサンス	12/22
1 2. フィオーレのヨアキムと歴史神学	1/5
1 3. 中世都市と民衆の宗教性	1/12
1 4. 宗教改革と近代世界	1/19

<キリスト教思想史について>

A. キリスト教思想史の構造

1. なぜ思想史か？ 思想と歴史
2. キリスト教思想史、教会史、教理史(Dogmengeschichte)
3. ・諸伝統のダイナミズム（内的要因・モチーフ）
 - ・共同体と社会（歴史）：ユダヤ・ユダヤ教、古代地中海世界・オリエント、教会
4. 時代区分の問題
 - 初期キリスト教（原始キリスト教、初めの1世紀）、初期カトリシズム
 - 古代／中世／（近世）近代

B. 石原謙(1882-1976)

『キリスト教の源流』岩波書店、1972年。

石原謙は、日本におけるキリスト教史研究（歴史神学）の開拓者であり、この分野の第一人者として長年にわたって学会をリードしてきた。本書は、『キリスト教の展開』（同年刊行）と合わせて、「ヨーロッパ・キリスト教史」を構成するものであって、著者のキリスト教研究の集大成というべき力作である。本書は石原のキリスト教研究の到達点を示すだけでなく、明治以降、欧米の最先端のキリスト教史研究（石原の場合は、ハルナック、トレルチ、シューベルトらの19世紀から20世紀前半にかかっていたドイツ・キリスト教史研究）を学びつつ展開された日本におけるキリスト教史研究の金字塔と言える。

本書における石原謙の基本的な立場は、「キリスト教とは何かとの問を、その歴史を通して解く」（キリスト教の歴史性）というものであり、次の三つの問題を中心に論述が進められる。第一の問題、「キリスト教のヘレニジールンク」（第一部「キリスト教の起源」

の第三章）であり、キリスト教のヘレニズム世界への展開、護教家やユスティノス、オリゲネスといった教父、ローマ帝国との関係（迫害下における成長と公認・国教化）、教義的論争、そしてビザンティン教会への継承が論じられる。第二の問題は、「ラテン世界において形成され中世ヨーロッパの基礎となったカトリック教会」（第二部「カトリシズムとアウグスティヌス」の第一章）であり、帝国教会の東西分離、ローマ教会の自立とその特徴あるいは意義が扱われる。そして、第三の最も詳細に論じられる問題は、以下に紹介する「アウグスティヌスの人格と神学形成の過程、そしてそのキリスト教史における歴史的意義」（第二部の第二章から第四章）であるが、本書は、こうした中心的な問題との関連で、キリスト教の歴史観や時代区分といった方法論、原始キリスト教、シリア・キリスト教、修道院の起源と歴史、民族移動と中世への展開、といった諸問題にも言及しており、キリスト教の歴史を教会や神学の内的発展に焦点を当てつつも、政治史や文化史への関連を視野に入れた本格的な研究となっている。以下、第三の中心問題であるアウグスティヌス論の内容を紹介したい。

石原が、キリスト教の歴史性という観点から教会史家エウセビオス（キリスト教思想上、最初の本格的な歴史家）に注目するのは当然であるが、歴史神学（世界史神学）の創始者としてさらに重視するのはアウグスティヌスである。石原は多くの紙幅を割いて、四、五世紀の歴史的状況下におけるアウグスティヌスの人格と思想の内的発展を、アウグスティヌス研究の成果を踏まえつつ、『告白』『三一神論』『神国論』などの著作の詳細な検討に基づいて叙述している。こうして示された結論の一端は、パウロ主義の回復者としてのアウグスティヌスはカトリック教会の完成者であるとともに、その思想は中世のカトリック教会（とくに通俗的なカトリシズム）をはるかに超えた射程を有しているということ、アウグスティヌスは様々な論争に関わりながら歴史的状況を生き抜き、思想的には神学的予定論に到達したということである。

【参考文献】『石原謙著作集』（全11巻）岩波書店、1978-79.

C. 石原謙とキリスト教史

1. 『キリスト教の源流』（著作集第八巻）

- 第一部 キリスト教の起源
 - 第一章 キリスト教史序論
 - 1 キリスト教歴史観の成立
 - 2 教会史の概念
 - 3 教会史の時代区分
 - 第二章 原始キリスト教
 - 第三章 キリスト教のヘレニズム化
 - 第四章 ローマ帝国とキリスト教
 - 第五章 帝国教会と東西分裂
- 第二部 カトリシズムとアウグスティヌス
 - 第一章 カトリック教会の成立
 - 第二章 アウグスティヌス（その一 前半生の内的発展）
 - 第三章 アウグスティヌス（その二 教会司教）
 - 第四章 アウグスティヌス（その三 神学）
 - 第五章 民族移動と中世期への過渡期

「私は三つの焦点に絞って、これを中心的軸として論述することとした。第一にキリスト教のヘレニジールンクである。教会および神学の形成も基本的にはその結果として見られ、そこからビザンティン教会が成立したことを叙説する。第二にはそこからラテン世界に波及し土着して固有のカトリック教会が成立し、更にローマ的伝統を継承してローマ・カトリック教会を形成して西ヨーロッパに伸び、中世史の基礎をなした経過を明らかにする。第三にしかしローマ的伝統は政治的に有力であったが、思想的に弱く、内容に乏しい。これを鍛錬して宗教的神学的に強化するために、アウグスティヌスの出現を待たねばならなかった。彼はカトリシズムの完成者であると共に、ある意味でカトリック教会を超えた人物であり、全キリスト教史を通じて最大偉人の一人である。いかにしてかかる人物が生まれ形成されることを得たか。その人格および神学形成の過程を詳らかにするのは私の最大関心事であった。イエーガーがアリストテレスの内的発展の歴史に倣うことは固より私の微力のよくするところではないが、可能な限り彼の内的発展の生涯を追跡することを努めたつもりである。それはまたキリスト教がヨーロッパ史を構成するゆえんを理解する道でもあろう。」(23頁)

2. 『キリスト教の展開』(著作集第九巻)

第三部 中世カトリシズム

第一章 中世史序説

第二章 中世カトリシズムの歴史的前提

第三章 教皇権の最高潮

第四章 中世末期のカトリック教会

第五章 過渡期、ルネッサンス時代

第四部 宗教改革

第一章 宗教改革時代のドイツにおけるキリスト教

第二章 マルティン・ルター

第三章 宗教改革運動

第四章 福音主義教会

第五章 信條形成

第六章 プロテスタンティズムの動静

第七章 プロテスタント諸教会の成立(カルヴァンとその影響)

第五部 近世キリスト教

第一章 近世カトリシズム

第二章 近世プロテスタンティズム

第三章 結び、近代史におけるキリスト教の態勢

「下巻の内容の対象は中世初期以来近代まで十数世紀に亘り、殊にその期間におけるヨーロッパの歴史は政治・社会・道徳・法律・学芸等すべての文化がキリスト教を基本また指針ないし軸として展開された過程でもある故に、その全貌を簡単な条項に要約することは不可能である。しかもこれをキリスト教の展開という角度から概観しようとするとき、中世期はとも角として、近世にあっては政治・文化の各部門が独立して発展し始めているので、一層の困難がというよりもむしろ偏向的史観に陥るのを止むを得なくなる恐れがある。それにもかかわらずキリスト教史の課題はそれなりに意味があると信じる。」(3頁)

D. ペリカンと『キリスト教の伝統 教理発展の歴史』

Jaroslav Pelikan, *The Christian Tradition. A History of the Development of Doctrine*, 1～5, The University of Chicago Press, 1971-1989.（鈴木浩訳『キリスト教の伝統——教理発展の歴史』全5巻、教文館）

「若干の定義」（35-45）

キーワード：教理(doctrine)／教義／神学、教理史、伝統(tradition)

「イエス・キリストの教会が神の言葉に基づいて信じ・教え・告白する事柄（内容）、それがキリスト教教理である。教理は教会の唯一の働きではないし、第一義的な働きでもない。教会は神を礼拝し、人類に奉仕する。教会はこの世の変革のために働き、来るべき世でのその希望の完成を待ち望む」「教会は常に学校以上のものである」「しかし、教会は学校以下のものであることもできない。教会の信仰と希望と愛、そのすべては、教えと告白のうちに表現される」、「キリスト教会は、キリスト教教師なしでは今日われわれが知っているような教会ではなかったであろう。」（35頁）

「このようなことはすべて」「キリスト教教理の定義ではなく、その説明である」「なぜなら、『教理』という言葉は形式の上でも、常に同じことを意味したわけではないからである」、「キリスト教教理とは、神の言葉に由来する、人を救う、あの知識の内容のことである、と定義していいであろう。」（36）

「教理的な説教」「倫理的な勧告」、「教理と生活との区別は、分業が行われるようになるはるか以前から、機能していた。」

「キリスト教教理は教会が果たす働きである。教理史は、神学史やキリスト教思想史と同一視されてはならない」（37）、「教会の教えと、教会の教師たちの見解との間に明確な線を引くことは通常は難しいし、また時には不可能である」、「とはいえ、われわれの考察の特別な対象は、教会の教理のこの発展である。」

「教理とは、信じられ・教えられ・告白された事柄である (Doctrine is what is believed, taught, and confessed.)。一八世紀の教理史が独立した研究領域として現れて以来、それは、告白された事柄、すなわち、種々の教會的權威によって採択され・教会の公の教えとしての強制力を持った・キリスト教信仰の規範的な言明としての教義(dogma)に、的を絞ってきた。」「プロテスタント主義のほとんどは、その信仰告白の展開を一七世紀の半ばまでに完結したので、プロテスタント教義史(a history of Protestant dogma)はありえなかった。ありえたのはプロテスタント神学の歴史であった。しかし、プロテスタント主義内部での教理の歴史には、神学体系の羅列以上のものがあつた。」（38）

ハルナック (Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Gogmengeschichte*)

「教会が告白する事柄とは、教会が信じ・教えてきた事柄、少なくともその一部だからである。教義史においては、信仰に関する教会の規範的な言明とは区別される意味での、教会が信じ・教える事柄は、信仰告白と教義に対する注解として重要な意義を持つ。教理の発展を扱う本書では、信仰告白や教義は、教会が信じ・教え・告白する事柄の指標として重要な意義を持つ。」（39）

「教理の専門的注解者であつた神学者」（40）

「このように定義されたキリスト教教理が歴史の中で取つた形態が、伝統である。『教理』という用語と同様に、『伝統』という言葉は、伝達のプロセスとその内容とを同時に指している。従つて、伝統とは教会の歴史の発展の中でのキリスト教の教えの継承を意味する

が、それはまた、継承された中身をも意味することになる。」(42)

「伝統という観念そのものの中には、運動と変化としての歴史という概念と整合しないとされる語義がある。なぜなら、伝統とは古いものであって、その古さのゆえに神聖なものであり、ずっと昔に最初に確立されて以来普不変である。伝統は歴史を持たない、なぜなら歴史とは、以前には存在しなかったものがある時点において現れて来ることを意味するからである」(42-43)、「正統的なキリスト教教理は永遠の真理であり、最初から教えられたものであるから、歴史を持たなかった。」

近代的な意味での歴史、人間の活動の両極性

「しかし更に考察するすれば、伝統と歴史の問題はずっと複雑なものに見えてくる」(43)、「歴史研究に対する近代の批判的な方法論が登場したことに伴って現れてきたのは、伝統をその起源に遡って見、特定の教理の定式が時間的にどの時点で起こったかを、その定式化を理解する際の本質的な要素とする新しい見方以外の何物でもなかった、ということも明らかである。」(44)

「キリスト教教理の発展は、キリスト教神学の研究における一つの争点である」「と同時に」「思想史における一つの章でもあり、この両方の学問領域の方法論によって研究され、その判断基準によって継承されねばならない。」(44)

「歴史を欠く伝統は、発展のすべての段階を固定的に定義された一つの真理へと均質化してしまっし、逆に、伝統を欠く歴史は、健全な成長と癌細胞の異常発達との区別を全く任意なものとしてしまう仕方によって、教理の発展を相対化する一つの歴史主義を作り出した。われわれの教理史は、この両方の落とし穴に落ち込まないように努める」、「伝統とは死んだ者の生きた信仰であり、伝統主義とは生きている者の死んだ信仰のことである。」(Tradition is the living faith of the dead; traditionalism is the dead faith of the living. p.9)

「この教理史の神学的前提は」「歴史を一つの特定の立場から読む読み方に基づいているのだが、神学の多様性と福音の一致 (the variety of theologies and the unity of the gospel) である。多様性と共に一致、そして多様性の中での一致である。本書は、キリスト教の歴史には本当の新しさと変化があったことを受け入れることと、真の発展と成長があったことを是認することとに基づいている。」(45)

キリスト教思想>キリスト教神学>教理>教義。世界史、一般的な世俗的歴史

<文献>

1. Denzinger-Schönmetzer, *Enchiridion symbolorum. definitionum et declarationum*, Herder.
2. Philip Scaff(ed. / Revised by David S. Schaff), *The Creeds of Christendom with a History and Critical Notes*, Baker Book House.
3. 『信条集 前編・後編』新教出版社。